

〈工芸の美〉と宗教的協働

——柳宗悦の「協団」とウィリアム・モリスの「フェローシップ」——

島 貫 悟

一 はじめに——問題の所在

民芸運動の主導者として知られる柳宗悦（一八八九—一九六一年）は、一九世紀後半のイギリスでアーツ・アンド・クラフツ運動を主導したウィリアム・モリス（William Morris, 1834-1896）としばしば比較される。

柳とモリスの思想を最初に比較した英文学者の壽岳文章（一九〇〇—一九九二年）は、「二つの工芸論——モリスと柳宗悦」（一九三四年）において、その共通点と相違点を分析している。

壽岳は、まず両者の共通点として、ともに中世を理想としながら、近代化の中で失われつつあった民衆による手仕事の価値を再評価したことを挙げている。⁽¹⁾ 実際、モリスは、「近代科学により積み上げられた全ての知識、近代の商業が持つ全てのエネルギ―、近代思想の全ての深さと精神性をもつても、一四世紀にパークシャーの無学で迷信的な農民によってなされた手仕事と同じだ

けのものを再び生み出すことは不可能である」と語り、中世を理想としながら近代文明を批判していたのだが、柳も工芸文化の点で中世が最も優れた時代であったと考えており、モリスの中世主義を擁護していたのである。⁽²⁾

一方で、壽岳は柳の工芸論が持つ宗教性を高く評価したのに対し、モリスは「宗教の世界に深く入らうとしなかった」と語り、「これモリスの工芸論が柳氏のそれに遠く及ばない所以である」と結論付けている。すなわち、壽岳は、柳とモリスの工芸論の差異が、その宗教性の有無にあるという理解を示しているのである。そして、この理解の妥当性は、その後の研究で十分に検証されることなく現在に至っている。

壽岳による以上の比較論について、藤田治彦は、その後近年に至るまで柳とモリスを比較した研究は少ないと語っているが、実際、壽岳以降、柳とモリスの工芸論に対する比較思想的研究はほとんどなされていない。⁽³⁾

他方で、近年、柳によるモリス受容の実実が、実証的手法によって研究されてきた。とりわけ、柳は社会論者としてのモリスの努力に敬意を示しながら、自身も「協団」(ギルド)を組織化する必要を説いていたことから、先行研究ではこの点に関する影響関係が問題となってきた。

例えば、中見真理は、柳が「フェロシップ」と呼ばれるモリスの思想について解説した記述を熱心に読んでいたことを指摘し、「このことは、柳が、モリスの *felicitas* 概念に無関心ではなかったことを示している」と述べている。「フェロシップ」とは、「仲間意識」や「連帯感」を意味し、社会主義に傾倒した晩年のモリスが重視した考えである。中見の指摘は、柳が工芸の協団について考える際に、モリスのフェロシップ概念を参照していた可能性を示唆するものとして興味深い。中見はモリスと柳の思想について、踏み込んだ比較は行っていない。

また、草光俊雄は「柳宗悦と英国中世主義」(一九九五年)において、柳が民芸運動に乗り出した一九二〇年代に、モリスを始めとする中世主義者たちの思想をいかに批判的に受容しながら、自身の理論を構築していったのかを検証している。草光は、柳が社会主義者としてのモリスの努力を高く評価した一方、「私は彼の善き意志を愛し得ても、彼の作を愛することが出来ぬ。なぜならそれは工芸の本質を離れてゐるからである」と述べ、モリスの美意識を批判したことを明らかにしている。こうした理解は、柳が民芸運動の草創期にモリスと向き合った際の基本的な態度をよく説明していると思われるが、柳とモリスの思想的関係をより詳細

に明らかにするためには、両者の主張の内容にさらに立ち入って、その異同を分析する必要がある。

そこで、本論では、柳とモリスの社会思想を比較し、その関係を分析したい。以下ではまず、壽岳の理解を再検討するため、モリスの宗教観を分析した上で、モリスの宗教観とフェロシップ概念とのつながりを検証する。次に、柳による協団の構想について、宗教思想とのつながりを中心に分析する。最後に、モリスが主張したフェロシップの思想と柳の協団論を比較し、その共通性と差異を明らかにしたい。

二 モリスのキリスト教理解とフェロシップの思想

1 モリスとキリスト教社会主義

近代化の中で失われる手仕事を再評価したモリスは、次第に資本主義に対する不満を強め、一八八三年に民主連盟(Democratic Federation)¹¹に加入すると、自らを「社会主義者」と称するようになった。しかし、モリスの社会主義は、工芸の復興という理想と常に不可分のものであり、マルクスの唯物史観とは異なるものであった。実際、モリス自身「社会主義はマルクスの理論に留まるものではない」と述べている。¹²

しかし、モリスが社会主義と宗教の関係をどのように捉えていたのかについては、先行研究で十分に論じられてきたように思われない。そこで、以下ではまず、キリスト教に基づく社会主義の実践を主張した「キリスト教社会主義」(Christian Socialism)と呼ばれる考えに対して、モリスがどのような立場を取っていたの

か見てゆくことから始めたい。というのも、キリスト教社会主義者たちは、モリスと同様、マルクス主義の唯物史観とは異なる立場に立ちながら、社会主義と宗教の融合を目指していたため、彼等との思想的関係を明らかにすることで、モリスの立場を浮かび上がらせることができると思われるからである。

モリスは、一八九〇年に行われた英国国教会の司教アルフレッド・バリー (Alfred Barry, 1826-1910) によるキリスト教社会主義についての講演に出席している。⁽¹³⁾ この講演でバリーは、高揚する社会主義の要求に対し、教会も真剣に向き合う必要があると語る一方、社会主義者による私有財産への批判は受け容れられないとの見方を示した。⁽¹⁴⁾ その上で、バリーは、キリスト教の説く「誠実と愛と正義と自己犠牲」⁽¹⁵⁾ という道徳こそが、労働者と資本家の間に融和をもたらすのであり、その実践こそが「真の社会主義 (true Socialism)」⁽¹⁶⁾ であると主張した。

しかし、講演に同席したモリスは、「主教の主張は、もし彼が平等な社会に向かつて講演しているのなら良いものである。しかし、彼の言う道徳、倫理、経済学、そして宗教は、中産階級にとつてのものである。〔中略〕資本家と労働者の融和は、虎と羊のそれである」⁽¹⁷⁾ と述べ、バリーは労働者と資本家の間に存在する経済的格差から目をそらしていると批判した。また、この講演に関連した記事の中でモリスは次のように書いた。

現在の資本主義の下での卑しい商業主義によって形作られた、キリスト教の最後の形態は偽善の塊である。このさもしい時代が社会主義の実現した時代に取って代わられる時、道

徳の体系、すなわち人生観は、すべてを包含するものになりえないだろうか。また、それは、社会主義思想とは別のものになりえるだろうか。その時、キリスト教倫理はどこに行ってしまうのだろうか。——社会主義の中に吸収されるのである。その時、別々の倫理体系は必要ない。⁽¹⁸⁾

すなわち、モリスは、資本主義と結びついた近代キリスト教のあり方を批判することなしに、社会主義とキリスト教を結びつけることはできないと考え、キリスト教社会主義には懐疑的な立場を取っていたのである。そして、社会主義によって平等な社会が実現した暁には、キリスト教の倫理体系は社会主義の中に包摂されるとするモリスの主張は、一見するとキリスト教に対して挑戦的であるようにも見える。それゆえ、ステファン・ウイリアムズは、「このエピソードは、モリスが無神論的見解を持っていたことを裏付けるものである」⁽¹⁹⁾ と結論付けているのだが、この理解には再検討の余地があると思われる。というのも、社会主義同盟のグラスゴー支部長を務めたJ・B・グレイシア (John Bruce Glasier, 1859-1920) は、モリスが晩年、「ある意味で私は信仰告白をしているキリスト教徒と同じくらい真剣なキリスト教徒なのです」⁽²⁰⁾ と語ったことを証言しているからである。

2 モリスの宗教観——「社会主義の宗教」とフェローシップ

では、モリスは実際のところ、キリスト教をどのように捉えていたのだろうか。ここでは、モリスと経済学者のE・B・バックス (Ernest Belfort Bax, 1854-1926) による共著『社会主義——その成長と帰結』 (Socialism: Its Growth & Outcome, 1893) の記述から、

モリスのキリスト教理解を分析したい。『社会主義』は、古代から近代までの歴史を、「社会主義の成長」という観点から記述した著作であり、その中ではモリスのキリスト教観が具体的に述べられている。

まず、モリスは、中世のキリスト教では、死後の救済を願う個人の内省による信仰よりも、封建制の下で、教会と世俗の権力が一体となった構造の方が重要であったと考え、「その秩序の中ではまた、神意によって定められた地位がだれにもあった」と語っている。つまり、中世においては、教会を中心とした信仰共同体の中で、人々の地位がみな神聖なものとして与えられていたとモリスは考えているのである。

一方で、近代のキリスト教は「普遍的・内省的な倫理、あるいは神性への責任」⁽²²⁾を重視する「個人主義的な倫理体系」⁽²³⁾であるとモリスは言い、ここでは「人間の人間に対する義務は二次的な重要な性しかなかった」と批判している。⁽²⁴⁾

しかし、社会主義によって人々の間に平等が実現した未来社会では、「同胞への責任」(responsibility to one's fellows)を重視する新しい道徳意識として、「社会主義の倫理」(Socialistic Ethics)や「社会主義の宗教」(socialistic religion)が生まれるとモリスは語り、⁽²⁵⁾「それはある意味で古い世界の倫理へのより高い次元での回帰となるだろう」と述べている。つまり、社会主義が実現した理想社会では、個人主義的な倫理体系である近代キリスト教が衰退する代わりに、共同体の中での人々の地位がみな神聖なものとして与えられていた中世キリスト教への「高い次元での回帰」が起ること

モリスは考えているのである。

そして、そうした「社会主義の宗教」の考えは、フェローシップの概念とも密接に結びついていたと考えられる。それは、モリスが社会主義同盟の機関紙『COMMONWEALTH』(Commonweal)に連載した小説『ジョン・ボールの夢』(A Dream of John Ball, 1888)の中の次の記述に読み取ることができる。

フェローシップは天国であり、それを失うことは地獄だ。フェローシップは命であり、それを失うことは死だ。そして、君たちがこの地上で行うことは、フェローシップのために行うのだ。地上における多くの人々の命はやがてこの地上から消えていこうとも、フェローシップの中にある命は永久に生き続ける。そして、君たち一人一人はその一部なのだ。⁽²⁷⁾

ここで、モリスはフェローシップを至高の価値と捉えた上で、フェローシップの中にある命は死後も永遠に生き続けるという思想を表現しているのだが、これは、イエスを信じる者は死後復活し、天国で永遠の命を得られるという、キリスト教の正統的な救済史観とは異なる死生観である。したがって、フェローシップに至高の価値と永遠性を見出すこの思想は、キリスト教の正統的な救済史観に懐疑的であったモリスが、キリスト教と社会主義の理想を統合した結果辿り着いた、独自の宗教理解であったと捉えられる。そして、それはまさに、「社会主義の宗教」の具体的表現に他ならなかったと考えられるのである。

以上の考察が示すように、モリスは、近代キリスト教の個人主義的側面を厳しく批判したが、キリスト教そのものを否定してい

たわけではなかった。そして、フェローシップの概念は、中世を一つの理想としながら、キリスト教と社会主義を統合し、理想的な宗教としての「社会主義の宗教」を実現しようとする、モリスの壮大な思索の一部であったことが明らかとなった。したがって、モリスの思想に宗教性がないとする壽岳の見方は不正確なものであったと言わねばならない。

三 柳の共同体論——「無心の美」と協団の思想

1 柳の民芸論——「自然の叡智」と「相愛の制度」

それでは、次に、柳の思想を見てゆこう。

柳は、最初の本格的な工芸論書である『工芸の道』（一九二八年）において、工芸の本質は、本来平凡な力しか持ち合わせていないはずの民衆の手から、極めて美しい品物が生み出される点にあると主張し、それを可能にするのは、「自然の叡智」と「相愛の制度」であると語った。⁽²⁸⁾そして、前者の「自然の叡智」については、器の美を例に、次のように述べている。

器に見られる美は無心の美である。「中略」そこに見られる多種多様な変化、又は自由自在な創造は、無心であつた彼等「工人たち」の美德から、所産せられたのだと云ふことを知らねばならぬ。「中略」知もなき者であつたから、彼等は自然を素直に受けた。それ故自然も自然の叡智を以て、彼等を終り迄守護した。彼等自らでは救ふ力がないからこそ、自然は彼等を救はうとする意志をいや強めた。⁽²⁹⁾（「」内は筆者による）

無名の工人によって作られた器に至高の美が宿るのは、それを作った人々が、美を作為することなく、無心で働いたからであると柳は考えた。そして、そのように無心で働く工人たちの仕事は、「自然の叡智」によって守護されていると柳は述べているのだが、この柳の主張は、浄土教を中心とした仏教思想を背景としている。すなわち、浄土教の信者が阿弥陀仏を一心に信じることで救われるように、無名の工人たちは、「自然」に頼って無心で働くために、至高の美を生み出すことができる⁽³⁰⁾と柳は考えたのである。

そして、近代においてそうした「無心の美」を生み出すためには、「相愛の制度」が必要であると柳は主張している。

昔の様な意味の無心の民芸は、今日の社会制度が一変しない限り、もう二度とは起らないであらう。それに目覚めたものは皆知識の実を喰べて了つたのである。それならどうしたら意識的な吾々が、正しい工芸を産む事が出来るか。此問題に解答を与えようとするのが、今度のギルド(GUILD(組合)の生活である。⁽³¹⁾

「今度のギルド」とは、この論考が書かれた一九二七年に柳が中心となって京都で発足した上加茂民芸協団のことである。柳は、近代に入り、意識的、主知的傾向が強くなった人間が、そのような状態から抜け出し、中世のような「無心の美」を生み出すためには、ギルドを組織することが有効であると主張したのである。

2 柳の協団論とペンティのキリスト教社会主義

このように、柳が、工芸の美を構成する要件として、社会制度を重視していた背景には、資本主義社会に対する強い問題意識が

あった。⁽³²⁾しかし、モリスもそうであったように、柳はマルクス主義の唯物史観には否定的であり、協団の思想を練る上で主に参照したのは、ギルド社会主義の創始者とされるA・J・ペンティ(Arthur Joseph Penny, 1875-1937)の思想であった。

ペンティは、資本主義体制の下での競争原理に抵抗するために、中世的なギルドによって、生産の質と公正な価格を保証することが有効であると主張し、さらにそうした社会を実現するためには、中世のようなキリスト教道徳を再生させる必要があると説いていた。⁽³³⁾そうしたペンティの考えは、キリスト教を社会主義の基礎に据えようとした点ではキリスト教社会主義の系譜に連なるものであり、中世を理想としながら近代を批判した点では、ジョン・ラスキン(John Ruskin, 1819-1900)やモリスの思想に連なるものであった。

中見真理は、柳によるペンティ思想の受容について、「柳がとくに力を入れたのは、ペンティがキリスト教道徳に求めていたものを、仏教(しかも日本的仏教としての浄土系思想)⁽³⁴⁾に置き換え、かつそれを美と関連づけて論じていくことであった⁽³⁵⁾」と述べている。そこで、この点に関する柳の考えを具体的に明らかにするため、ペンティと柳の主張を比較したい。

ペンティは、『キリスト教社会学に向けて』(*Towards a Christian Sociology*, 1923)という著書の中で、「精神的事柄を第一に置くことに同意しない限り、人間はとうとう互いに結合することができない⁽³⁶⁾」と述べ、「神を愛し、隣人を愛しなさい⁽³⁷⁾」というイエスの言葉を、社会救済のための最も基本的な要件として捉え直している。

その上で、ペンティは次のように述べている。

おそらく、私たちはキリスト教社会学の基礎が何に置かれるべきか理解し始めたであろう。それは神への愛と隣人愛の相互依存の上に置かれるべきである。これらの掟はどちらも独立には成り立ちえない。神との正しい関係は、隣人との正しい関係のために必要であり、また逆に隣人との正しい関係は、神との正しい関係のために必要なのである。⁽³⁸⁾

すなわち、ペンティは、人間が調和のとれた社会を築くためには、神への信仰という精神的価値を共有する必要があると主張したのである。

柳は、このペンティの著作を読んだ翌日に『工芸の協団に関する一提案』(一九二七年)を著している。⁽³⁹⁾この中で柳は、協団には「互を結合させる共通の信仰がなければならない⁽⁴⁰⁾」と語り、「この団体は正しき工芸美への、共通の信仰を有つたものでなければならぬ⁽⁴¹⁾」と述べている。つまり、柳は、精神的価値の共有による連帯を主張したペンティの考えを受け継ぎながら、ペンティがキリスト教社会学の基礎としていた神への信仰を、「正しき工芸美⁽⁴²⁾」への共通の信仰に置き換えている。そして、柳の言う「正しき工芸美」とは、「無心の美」に他ならないのである。

以上のように、工人たちがその仕事を「自然」にまかせ、無心で働くときに至高の美が生まれると考えた柳は、近代においてそうした製作を可能にするために、資本主義の弊害を克服する仕組みが必要であると考えた。そして、柳は、ペンティのキリスト教社会主義の議論を参照することによって、「無心の美」への共通の

信仰で結ばれた工人たちの協団という考えに辿り着いたのである。

四 柳の協団とモリスのフェローシップ

——その共通点と相違点

最後に、柳の協団とモリスのフェローシップの思想を比較し、その共通点と相違点を考察したい。

両者の共通点としては、第一に、近代化による工芸の衰退という問題を、人間にとって極めて重大な損失であると考え、手工芸の文化が栄えた中世を理想としながら、共同体を巡る思索を展開した点が挙げられる。そして、両者はいずれも、資本主義を批判し、社会主義に傾倒しながらも、マルクス主義とは距離を取っていた点でも共通していた。

第二に、柳とモリスがそれぞれ辿り着いた協団とフェローシップの思想は、いずれも宗教性を伴うものであったことが、以上の考察から明らかとなった。柳の協団の思想は、仏教思想に基づく民芸の美学に、ペンティのキリスト教社会主義を接続したものであったのに対し、モリスのフェローシップの思想は、キリスト教と社会主義に対するモリスの理想を統合したものであった。

一方で、両者の相違点としては、宗教に対する向き合い方が異なっていたことが指摘できる。宗教哲学者でもあった柳は、浄土教を始めとする既存の宗教から汲み取った思想を、積極的に自身の理論に応用していったのに対し、モリスは、宗教が社会の中で果たす役割を重視する観点から、キリスト教を批判的に捉え直し、理想的な宗教としての「社会主義の宗教」を構想した。そうした

両者の違いは、キリスト教に基づく社会主義の実践を主張したキリスト教社会主義に対する対照的な態度によく現れている。

また、柳とモリスの共同体論では、理想とされる人間像が異なっていたことも重要であると思われる。柳は、工人たちが無心で働く姿に理想を見出したのに対し、モリスは、工人たちが「喜びに満ちた状態 (the pleasurable satisfaction)⁽⁴⁹⁾」で働くことが理想であると考えていた。このモリスの考えは、一見すると単純で甘いものであるようにも見えるのだが、以上の考察を踏まえれば、こうした主張にも宗教的奥行きが存在していた可能性がある。いずれにせよ、近代において工芸の復興を目指した柳とモリスが、人々の協働を重視し、さらには両者の思想が宗教的次元にまで及ぶものであったということは、民衆の芸術としての工芸が人間にとって持つ根源的な意味を示唆しているように思われる。そして、両者の思想は、工芸の問題を通じて、個人主義の限界を改めて浮かび上がらせているように思われるのである。

- (1) 壽岳文章「二つの工芸論(中)——モリスと柳宗悦」『英語青年』七二巻五号、一九三四年二月、八—九頁。
- (2) William Morris, "Some Hints on Pattern Designing," [1881], in *The Collected Works of William Morris*, 24 vols., Ed. May Morris, London: Longman Green, 1910-1930, vol. 22, p. 180.
- (3) 柳宗悦「工芸雑語」(一九三四年)『柳宗悦全集 八巻』筑摩書房、一九八〇年、五八七頁。
- (4) 壽岳文章「二つの工芸論(下)——モリスと柳宗悦」『英語青年』七二巻六号、一九三四年二月、八頁。
- (5) 同論文、七頁。

- (6) 藤田治彦「アーツ・アンド・クラフツと工芸の変貌——ウィリアム・モリスと柳宗悦をめぐる」『美學』五巻二号、二〇〇三年、二五頁。
- (7) 藤田も柳とモリスの関係を論じているが、藤田の研究は“arts and crafts”という言葉をも、柳が「美術と工芸」と訳したこの問題点を考察したものであり、柳とモリスの共通点と相違点に関する理解では基本的に壽岳の見方が踏襲されているように思われる。
- (8) 柳宗悦「工芸の道」一九二八年『柳宗悦全集 八巻』二七七頁。
- (9) 中見真理「柳宗悦——時代と思想」東京大学出版会、二〇〇三年、三三三頁。
- (10) 柳、前掲書、二〇三頁。
- (11) 民主連盟は、H・M・ハインドマン (Henry Mayers Hyndman, 1842-1921) を中心に二八一年に設立された社会主義団体である。
- (12) Morris's blind letter, 30 December 1887, in *The Collected Letters of William Morris*, Ed. Norman Kelvin, [1984], 4 vols, Princeton: Princeton University Press, 2014, vol. 2, part B, p. 729.
- (13) 以下、バリーの講演を巡るエピソードにつづいて、次の論文を参照した。Stephen Williams, "Morris, Christianity and Socialism: An Episode," *The Journal of William Morris Studies* 21(3), 2015, pp. 38-45.
- (14) Alfred Barry, *Lectures on Christianity and Socialism: Delivered at Lambeth Baths, February and March 1890*, London: Cassell, 1890, p. 82.
- (15) *Ibid.*, p.110.
- (16) *Ibid.*, p.165.
- (17) "Bishop Barry's Lecture at Lambeth: A Meeting Broken up in Confusion," *Pall Mall Gazette*, 26 February 1890, p. 6.
- (18) William Morris, "Correspondence: Christianity and Socialism," *Commonweal*, 6(217), 8 March 1890, p. 77.
- (19) Williams, *op. cit.*, p. 43.
- (20) John Bruce Glasier, *William Morris and the Early Days of the Socialist Movement*, London: Longmans Green, 1921, p. 172.
- (21) William Morris & Ernest Belfort Bax, *Socialism: Its Growth & Outcome*, London: Swan Sonnenschein & Co., 1893, p. 95.
- (22) *Ibid.*, p. 297.
- (23) *Ibid.*, p. 327.
- (24) *Ibid.*, p. 297.
- (25) *Ibid.*, pp. 298-299.
- (26) *Ibid.*, p. 298.
- (27) William Morris, *A Dream of John Ball*, [1888], in *The Collected Works of William Morris*, vol. 16, p. 230.
- (28) 柳、前掲書、六二頁。
- (29) 同書、八四—八五頁。
- (30) この点についての詳細は、拙論「柳宗悦の民藝論における工人観と仏教思想——ウィリアム・モリスとの比較に向けて」『比較思想研究』四五号(二〇一九年三月)一〇〇—一〇八頁を参照。
- (31) 柳宗悦「工芸の協団に関する一提案」(一九二七年)『柳宗悦全集 八巻』四九頁。
- (32) 柳「工芸の道」『柳宗悦全集 八巻』一八〇頁。
- (33) 同書、七一頁。
- (34) Arthur J. Penny, *Post-Industrialism*, London: George Allen & Unwin Ltd., 1922.
- (35) 中見、前掲書、一八四頁。
- (36) Arthur J. Penny, *Towards a Christian Sociology*, London: George Allen & Unwin Ltd., 1923, p. 42.
- (37) 「『モリスの福音書』」二二章三二—三九節。
- (38) *Ibid.*, p. 44.
- (39) 中見、前掲書、一七五頁。
- (40) 柳「工芸の協団に関する一提案」『柳宗悦全集 八巻』五四頁。
- (41) 同上。
- (42) William Morris, "The Aims of Art," [1886], in *Signs of Change*, in *The Collected Works of William Morris*, vol. 23, p. 91.
- (こまめな・やゝ) 比較思想、東北大学大学院博士課程